

年間第 30 主日 10 月 24 日分かち合い

マルコ 10-46～52

ここ数日の寒さで一気に秋が深まり、今年も終わりが近いことを感じます。典礼暦もあとひと月足らずで待降節に入り、新しい年を迎えます。こうした時期、今日の朗読箇所も、イエスの生涯の終わり、受難に近い時期の出来事が読めます。

福音に出てくるエリコという町は、都エルサレムの東、険しい坂を一気に下った死海に近い古い町です。エルサレムに通じる道の最後にあたる町です。そこでイエスは一人の盲人に出会います。マルコは、バルティマイという名前まで記しています。よほど、印象的な出来事だったのでしょう。道端に座って物乞いをしていた彼は、イエスが通りかかることを察知して、大声で叫びます。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と。当時、盲人は無力で、人々の善意にすがって生きるしかない、みじめな存在でした。そんな境遇にありながら、人々の制止をはばかりことなく叫び続けます。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と。

イエスは、彼を呼んでこさせ、喜び踊る男に、「何をしてほしいか」と尋ねます。「先生、目が見えるようになりたいのです」と素直に答える彼に、イエスは、「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と言われます。典型的な奇跡の情景です。しかし、これは、イエスがエルサレムに入る直前、生涯の最後の奇跡です。エルサレムに入られると、もはや、奇跡を行うことはなさいません。

この出来事は何を物語っているのでしょうか。共観福音書がそろって、イエスの最後の奇跡として、この出来事を記しているのは、それがただもう一つの奇跡であるということではなく、イエスがなされた奇跡を要約するような、象徴的な出来事だったからではないでしょうか。イエスは、短い公生活の間、多くの病人を癒されました。重い皮膚病にかかった人、手足の不自由な人、目や耳に障害をもった人、悪霊に憑かれた人、そのような自分の弱さ、みじめさ、無力さを、いやというほど感じている人に、健康の回復という大きな恵みを注がれました。しかし、それは、ただ、目の前に現れた病人に対する癒しではなく、世界中の貧しい人、小さな人、弱さを抱えている人、自分の力、人間の力ではどうすることもできない、そうした禍に見舞われている人々への神の限りない慈しみを表すしるしでした。自分の無力をいやほど実感している盲人は、イエスに近づき、憐れみを願うことで癒しの恵みをいただきました。神の全能の力を体現するイエスの前に、信仰を表明することだけが、必要でした。

今日の第一朗読では、旧約聖書からエレミヤの預言が読まれました。厳しい言葉に満ちたエレミヤには珍しい、神のいつくしみの言葉、喜びと慰めにあふれる言葉が記されていました。「わたしは彼らを北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も、歩けない人も、身ごもっている女も、臨月の女も共にいる。彼らは大いなる回収となって帰ってくる。彼らは泣きながら帰って来る」と。

これは、昔イスラエルの人々が北の王国にとらわれの身としての日々を重ね、ついに、時満ちて、先祖の地に戻ることを許されることを預言する言葉です。これは、イスラエルがたどった道であるだけでなく、すべての人が体験する神の救いの業を物語る言葉です。神は、人間が抱える様々な痛み、苦しみ、悩みから解放し、真の喜び、平安を与えることのできるお方です。

わたしたちも人生の歩み続ける限り、様々な形の闇、迷い、過ちを経験し、自分の弱さ、無力さ、みじめさを味わわされます。その時こそ、自分の力、人間の力にだけ頼るのではなく、神の力、光、導きに心を開きましょう。そして、この盲人のように、信頼をもって「わたしをあわれんでください」とはばかりことなく叫びましょう。主はきっと、光を注ぎ、力を与え、正しい道に導いてくださいます。盲人の目を開く、と言うことは、神の世界に対して、目が開かれる、神の世界を見ることも意味します。主イエスだけが、目を開き、神の世界を開示する力をお持ちです。願ひましょう。必要なことは、ただ、謙遜で、すべてを主に委ねる信仰の心です。(S.T.)